慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ハインリヒ・ワインシュトック著 樫山欽四郎・小西邦雄訳 ヒューマニズムの悲劇：西洋的人間像における真と偽
Sub Title	Weinstock, Heinrich., Die Tragödie des Humanismus, Übersetzung V., Kinshiro Koshiyama, Kunio Konishi, Qulle Mayer, Heidelberg 2. Auflage 1954
Author	蔦木, 能雄
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1977
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.70, No.5 (1977. 10) ,p.568(72)- 571(75)
JaLC DOI	10.14991/001.19771001-0072
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19771001-0072

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

制権力の相対的ならぬ絶対的独自性の強調と，基礎還元主義とのディレンマ）を克服しようとする点においては，期せずして共通の志向性が明らかであり，日本資本主義研究の総括としての天皇制国家論の到来を思わせるに十分である。願わくは，中村氏の独創的な分析視角・方法論が，各論的研究を通じてさらに彫琢され，天皇制国家の総体＝全体像がより精密化されることを期待すると同時に，基礎構造的な日本資本主義（発達史）研究も，そうした本格的な国家史研究の成果に学びつつ，真の社会構成体認識に近づいてゆかねばならないと思う。

〔第4巻1975年12月，第5巻1976年12月，何れも東京大学出版会刊〕

尾城太郎丸
（経済学部教授）

ハインリヒ・ワインシュトック著
樫山欽四郎・小西邦雄訳

『ヒューマニズムの悲劇
——西洋的人間像における真と偽——』

（一）

本書は，ギリシアヒューマニズムと近代西欧，特にドイツヒューマニズムを主題として論じ，人間存在の負い目，悲劇という観点からヒューマニズムを追求したユニーク（？）な作品である。

評者は一読して，歴史の内容が捨象されている作品であると判断した。因みに評者の本書に対する最初の評価は，概ね次のようなものである。「個を，人間を，更には社会や国家や諸階級を歴史から抽象して，あれこれの解釈を試み，詮索を企てる議論など腹立たしいものはない。一切の歴史的諸連関を抜きにして人間存在を語ることは，主観的独在論への道を開くものでしかない。本書の著者は一切の諸現実を，従って個も社会も国家も諸階級もすべて「悲劇」の名の下に包括する。著者は一人，オリンポスの山上に神々と席を同じくし，下界の人間に託宣を告げる。“神を畏れよ”と。著者にあっては，己が尺度が万物の尺度であり，歴史を切り捨て，傲然と絶対的ヒューマニズムを説く姿は，巨人の肩に乗り，背丈の高きことのみを自慢する侏儒に等しいものであり，総じて哲学的茶坊主の駄弁である」と。

（二）

事実，著者の叙述からは歴史認識というものが感じられない。それはそれとして，本邦訳書の原本（第2版）が出版されたのが1954年であること，そして著者ワインシュトック氏の生誕が1889年であることを少しばかり考えねばならない。

本書第一部，第二部併わせて全篇10章にわたって展開されている人間存在の負い目，悲劇の意識はどこからくるものであろうか。その手掛りとなるべき著者の告白めいた章句が一ケ所ある。それは，普遍意志から普遍路線へ，と題する本書第二部第八章にある。「……もしも人々が，このわれわれの時代の人間として，つまり根本悪の現実を再び体験し，悪と悪人が存在す

ること(ただ単に常に悪を欲して善を行うという，例の力の，害もなく，簡単に笑いとばすことができて，どのみち真面目に受け取る必要のないような，部分としてではなく）を知り，1914年から，今日に至る時代を（傍点は引用者），学びながら悩んだ人間として，カントからフィヒテ，シェリング，ヘーゲルを経て，マルクスに至る道を歩いてくるならば，あたかも宇宙旅行を終えた後に，人間の住む地上という，現実的ではあるが，極めてきびいし大地を眼下にするかのように，思うことであろう」(p. 381) と。

多感な時代に第一次大戦，ドイツ共和国の誕生，ロシア革命を経験し，人生の最も充実する時期をファシズムと第二次大戦と祖国の廃墟の中に過す。そして本書公刊の年までに東西ドイツの分割と，東西両陣営の緊張激化が著者を直撃するのである。

著者の古典研究は，恐らく若い頃にはストア派的人間至上主義であったろう。即ち「……不安の克服を真剣におい求めたものは，エピクロス派ではなく，ロゴスの再建をめぐって争った敵手，ストア派であった」(p. 162) という確信に基づいていたに違いない。

しかし，著者の眼前にあったものは，ヒューマニズム——飽くまでも著者なりの——とは程遠い人間存在の否定の時代であった。著者の目は歴史の認識から愈々遠ざかり，神々への畏敬と実存主義的方向へ傾いていったことは否定できない。そして著者は，あらゆる人間存在を否定する，即ち悲劇の根本にあるものは結局“政治”——権力闘争としての——であるという認識に到達したのである。

著者は現実を，とりわけ政治の問題を避ける。政治の問題を避けることがヒューマニズムを人間が手に入れるための条件と説くのである。

だが，著者が歴史認識を捨て去ってみても「西洋の人間と，その歴史を理解しようとする者は，ギリシアのポリスとかかわらざるを得ない」(p. 5) という時，そこには政治的共同体としてのポリスの性格を否定することはできない。一個の社会が政治を頂点として権力を集中する時，共同体を構成する一個の人間は，ポリス的動物である限り，政治を認めざるを得ない。「……悲劇的構造とは，人間が自ら選んだのではない人生を引き受けなければならないということ……最も重要なのは，悲劇的な重荷を投げすてることができないことを，人間も知りぬいていることである」(p. 26)。

著者のいわんとするところは，結局，政治からの解放こそがヒューマニズムなのであるという，歪んだものでしかないのではないか。

（三）

それ故，著者は政治権力の奪取を志向する運動や思想と，当然，対決しなければならなくなる。本書における著者のマルクス解釈は，自己の絶対的ヒューマニズム——神たらんとする人間の要求 (p. 185) ——を擁護するための悪罵と中傷に満ちているだけで何ら学ぶものがない。或る意味でマルクス解釈の点で非常に素朴なのかも知れない。「もしマルクスにとって本当に人間が問題であるなら，なぜ特別にまた声高に，経済的条件とか社会的関係について語るのだろうか。なぜいつも語られるのは金銭とか生産手段とかいうような事柄なのであろうか。なぜ誇りをもって，はっきりと，自分の哲学を史的唯物論と呼ぶのだろうか……」(p. 378) と。

評者は著者ほどに一度で良いから頭で立って歩いてみたい。著者にあっては歴史の中から抽象された，一切の諸関係を無視した，現実に存在することが絶対に不可能な個人こそが大事なのであり，それがすべてなのである。その絶対的個人は観念と意識の自己展開を自由にできる。全世界の意志は彼に従属しなければならない。

著者にあっては存在が意識を決定するのではなく全く逆となる。「社会的存在は意識の変化がなければ変化しえないし，意識は存在の変化のなかでのみ変化しうる」(p. 378)。

評者は著者が次のように述べる時，著者の思想が生みだされた世界史の状況の如何を問わず，ヒューマニズムは断固闘いとるものであることを宣言する。「ヒューマニストが社会主義を恐れるのは，人間的人格を窒息させる恐れがあったからであり，また現にそうであるから」(p. 376) と。

もはや著者ワインシュトック氏は，ヒューマニズムの意味を知らぬ一介の茶坊主でしかない。著者がこれまで哲学的ヴェールをかぶって誇らしげに述べてきた人間の悲劇や存在の負い目とやらの議論は反動的諸階級の利益に奉仕するイデオロギーでしかない。著者ワインシュトック氏の負い目とは，自らの反動的イデオロギーを実存主義的に装うことによって隠蔽しようとした自己の良心に対してなのかも知れない。

著者は，現実の政治的諸問題を徹底的に避けることによって，却って政治的になろうとする極めて政治に

敏い人間なのである。

（四）

著者のヒューマニズムは，独善的エゴイストたる自己を隠す用語にすぎない。ヒューマニズムの本来の意味は人間の解放である。人間の解放は歴史を超越したところで行われるのではない。

著者は，ヒューマニズムも社会主義も共産主義，いわんや民主主義さえも相対立する概念としてとらえている。著者がヒューマニズムという言葉をやめてヒューマニストと言う時，そこには地獄への道につらなる善意の敷石があるように思えてならない。

「われわれは"現実的"ヒューマニストとして質問したい。もし，資本主義の否定が，マルクスの言う通り，精神の自己運動によって，つまり必然的に，……その反否定即ち共産主義によってもたらされるのではなく，むしろこの転覆がマルクスのいう革命的行動によって強行されるのだとすれば，その場合，われわれは，一体どのようにして共産主義が，否定の否定として，自分から真の人間的（傍点引用者）秩序という肯定的なものに止揚されると期待したらいいのか。……プロレタリアート独裁という形で権力を握った悪は，すすんで快くそれを捨てるほど一挙にお人好しになる…か」（p. 379—380）。

著者は，絶対理念が一人歩きして現実の人間社会に歩み寄ってくれるとでも思っているのだろうか。資本主義の否定が，果たして精神の自己運動によって行われるものなのだろうか。著者の世界観は常に絶対的なもの，真的なもの，これに対する「人間」の対応としかあらわれてこない。

（五）

革命を悪，権力を悪とし，政治的行動を潔しとしない"偉大な哲学者"ワインシュトック氏は現実的ヒューマニズムをどう実現するのだろうか。

最も良く人間というものを識り，政治的挫折をくり返したが故に最も政治というものを認識していた人を探すことであった。「ただひとり全く真剣に責任を感じて，アイスキュロスの精神から出発しながらも時代に合うようにそれを再建しようと企てる人がいた。あえて，こう言えるのは，目を覚まさせようとする精神が現に悲劇的な心ばせになっていたからに他ならない。このことはプラトンの『国家』にあてはまらないだろう」（p. 90）。

「……政治についてのプラトンのすべての思索は，権力の問題を，つまり人間の共同生活の危険ではあるが，欠かすことのできないものの問題を，いつ自分を倒すかわからぬものを頼りにせざるを得ない，というあらゆる自由な国家の悲劇的構造をめぐっている。……いずれにしろ，われわれが血塗られた経験から知っていることだが，いまだにどれほど細心に権力を分立しても，またどんなに賢明に監視や，この監視をするにしても，現実の権力欲を抑えようとしてうまくいった試しはありはしない」（p. 133）。

著者が最も期待した人物はプラトンであった。「……ヒューマニズムの良き助けになるのは，プラトンの本源的ヒューマニズムを措いて他にありえない」（p. 383）からである。

哲学的茶坊主氏は「偉大な発見」をした後に自画自賛する。「……真の人間存在を説くプラトンと，現代の大衆化した人間の人間化を説くマルクスとが，今日のわれわれにとって決して和解し難い敵ではなく，互いに頼り合う伴侶であるとすれば，すべての誠実なヒューマニスト達は，次のような課題が与えられていることになる。それは，真のヒューマニズムと人間的な社会主義の現実的な出会いをもたらすために手を貸すということである。……（マルクスが——引用者）失敗したのは時代の劣悪な姿に怒りを感じながらも，その最大の根拠，つまりは，人間自身のなかにある悪を認めようとしなかったからである」（p. 391）と。

マルクスや誠実なマルクス主義者は「時代の劣悪な姿」の前でお茶を濁すようなことはしないし，してもこなかった。時代の劣悪な姿がどのように，どこから生まれ，それはどうすれば除去できるかを常に具体的に提出してきた。

著者が「……われわれは繰り返し，ヘーゲル-マルクス-カントへという合い言葉を，力をこめて強調したいのである」（p. 426）と述べる時，著者の真意がどこにあるかは明らかである。カントを拠りどころにして，個の絶対的定立という概念だけを都合よく導き出すことによって，現実の「時代の劣悪な姿」を除去するために，ヒューマニズムを実現するための闘いが敢然と進められる時に，それをこっそりと持ち出してくることにあるのである。

著者の「ヒューマニズム」がどんなものであるかは，ビスマルクを登場させたことで明らかであろう。「…

…権力の現実性，つまり危険ではあるが，欠くことのできない姿を認識するためには，人間とその世界の悲劇的構造が見ぬかれていなければならない。こうして，はじめてドイツの唯一人の偉大な政治家ビスマルクのように，現実的政治が行われるのである」(p. 425-p. 426) と。著者がビスマルクをどう評価しようと自由であり，勝手である。だがビスマルクが歴史の審判をどう受けるかは全く別の問題である。

評者は，著者にあっては，社会主義，共産主義，民主主義の諸概念が相対立していると述べておいた。マルクスやエンゲルスの著作について，ほんの少しでも理解があれば，彼らが最も民主主義を愛し，それを現実的なものにしていくための闘士であったことは容易にわかるはずである。民主主義と共産主義は矛盾するどころか，民主主義を徹底して押し進めれば，共産主義の理論に到達することは歴史が証明してきたところである。

著者ワインシュトック氏が「最後にドイツ人相互の共存，憲法，内政についていうならば，青年を民主主義へと陶冶することが大切であろう。それはただたんに民主主義が……明らかに時宜に適しているからだけではなく，それが政治制度の形態のうちで，もっとも意欲的に，人間の自由と責任を考慮にいれるからである。つまり，もっともヒューマニズ的であるからである」(p. 427) と言明する時，その発言がいかに無内容な一般論で終わっていることだろうか。ドイツの置かれている政治的，経済的，社会的，その他の具体的現実的な歴史関係の中で，「人間の自由と責任を考慮に入れる」とは何を意味するのだろうか。政治的諸行動を，権力を悪とし，そしてすべての人間の悲劇的存在を強調して人間の無力を説いてきた著者には，生きた人間の自由も民主主義も明らかとなるはずがない。

〔創文社刊，昭和51年10月刊，497ページ，5,000円〕

蔦木 能雄
(経済学部助手)

ジェームズ・ヒントン

『最初のショップスチュアード運動』

「機械工たちの戦闘性は，戦時中を通じて時の政府が直面した巨大な国内問題の一つであった」(本書，序文)。現代においてふたたび，職場委員(shop stewards)の運動が機械工業を中心に盛り上っている英国において，著者J. Hinton (ウォーリック大学講師) は，運動経験者の一人として，第一次大戦下の運動を分析し，その意義を生かそうとしている。

本書は，以下のように構成されている。

第一部　背景
　第一章　奴隷国家
　第二章　クラフトの伝統
第二部　戦時の闘争
　第三章　クライド労働者委員会——起源と方針
　第四章　クライド労働者委員会——ダイリューション闘争
　第五章　シェフィールド労働者委員会の起源
　第六章　ウリッヂ，バロー，タイン地方，——失敗の重要性
　第七章　五月スト
　第八章　ミッドランド——公認化と去勢
　第九章　革命的職場委員運動に向けて
　第十章　頂点と敗北
第三部　解釈と意義
　第十一章　自立したランクアンドファイルの組織
　第十二章　ソヴェトの思想
　第十三章　結論

(1)

本書の著者は，W. Gallacher, D. Kirkwood, J. T. Murphy ら運動指導者たちの記述や，多数の機関紙・パンフなどを活用するのみならず，政府側のC. Addison 回想録をはじめ，軍需省などの政府機関文書，内閣文書など膨大な資料を駆使し，政府，労働運動の双方から，内情をも浮彫りにした記述を行なっている。これが本書の第一の特色である。また，構成にみられるように，大戦中の動きを時系列でおっていくとともに，各運動中心地毎の動向と特徴を横断的に示し，対比させていく，という手法がとられている。これは第